

A romantic couple is walking barefoot on a sandy beach at sunset. The man, on the left, is wearing a dark t-shirt and pants, and has his arm around the woman's shoulder. The woman, on the right, is wearing a light-colored short-sleeved shirt and a dark skirt. They are walking away from the camera towards the ocean. The sun is low on the horizon, creating a warm, golden glow across the sky and water. The ocean waves are visible in the background, and the overall mood is peaceful and intimate.

愛する家族を
亡くした
とき……

どなたかあなたの愛しておられた方で
死の眠りに就いた方がおられますか。

そのことを今も悲しく感じておられますか。

悲しみをいやす何かの助けが必要ですか。

死んだ人たちのために希望がありますか。

もしあるなら、それはどんな希望ですか。

どうしたらそれを確信できるでしょうか。

この冊子の中には、これらの問いに対する、聖書
からの慰めとなる答えが与えられています。これを
注意深くお読みになることをお勧めいたします。

「そんなはずはない」

3 ページ

このように感じるのは普通のことですか

7 ページ

この悲しみにどうしたら耐えてゆけるでしょうか

14 ページ

他の人はどのように助けになれますか

20 ページ

死んだ人たちのための確かな希望

26 ページ

この出版物は販売を目的としたものではありません。世界的な聖書教育活動の
一環として提供されており、その活動は自発的な寄付によって支えられています。

寄付をしたいと思われる方は www.jw.org をご覧ください。

聖句は、特に注記がない限り、現代語による「新世界訳聖書—参照資料付き」からの引用です。

愛する家族を亡くしたとき

When Someone You Love Dies

2014年10月印刷版

Japanese (we-J)

© 1994, 2003, 2005

Watch Tower Bible and Tract Society of Pennsylvania

発行者

ものみの塔聖書冊子協会

Made in Japan





「そんなはずはない!」

ニューヨーク(米国)に住むある人はこう話します。
「息子のジョナタンは、数マイル離れた友人たちのところへ行っていました。妻のバレンティーナは息子がそこへ出かけるのをあまり好みませんでした。妻はいつも、交通のことを心配していました。でも、息子はエレクトロニクスのことが大好きでした。友人たちが仕事場を持っていて、息子はそこで実地の経験を積めたのです。私はニューヨーク、ウエスト・マンハッタン¹の自宅にいました。妻はプエルトリコの親族を訪ねていて留守でした。『そろそろジョナタンは帰るころだ』と私は思いました。折しも、ドアのベルが鳴りました。『きっとジョナタンだ』。ところが、そうではありませんでした。それは、警察、そして、救急隊員でした。『この運転免許証、どなたのかお分かりでしょうか』と警察官が言いました。『はい、これは、私の息子の、ジョナタンのです』。『悪いお知らせをしなければなりません。事故がありました。そして……ご子息……ご子息が亡くなられました』。『そんなはずはない!』、それが私の最初の反応でした。その、突然の衝撃が私たちの心に開けた傷あなは、幾年もたった今なお癒えていません^い」。





『悪いお知らせをしなければなりません。事故がありました。
そして……ご子息……ご子息が亡くなりました』。

バルセロナ(スペイン)に住む別の父親はこう書いています。「1960年代当時のスペインで、私たちは幸せな家族でした。妻のマリア、それに3人の子供たち、男の子のダビードとパキートウ、そして女の子のイーサベル、それぞれ、13歳、11歳、9歳でした。

「1963年3月のある日、パキートウは激しい頭痛を訴えて学校から帰って来ました。私たちは、何が原因なのかと途方に暮れました—でも、長い時間ではありません。それから3時間後、パキートウは死にました。脳内出血がパキートウの命を突如奪ったのです。

「パキートウの死は、今から30年も前になります。それでも、パキートウを失ったうずくような痛みは、今日まで私たちの中に残っています。親が自分の子供を失って、自らの一部を失ったように感じないことはできません。どれだけの時間が過ぎようと、ほかにどれだけ子供たちがいようと、これは変わらないはずです」。

自分の子供を亡くしたこれら二つの経験は、子供の死に伴う傷が親にとっていかに深く、いかにいやし難いものかを物語っています。次のように書いた一心理

愛する家族を亡くしたとき

学者の言葉はいかにも真実ではないでしょうか。「子供の死は普通、年配者の死に比べてずっと悲しく、ずっと大きな痛手となる。子供は家族の中で死の予測からは最も遠いはずだからである。……どんな場合でも、子供の死は、将来の夢の喪失、きずな[息子、嫁、孫との]の喪失、……経験するはずであった楽しみの喪失となる」。そして、この深い喪失感、流産によって幼子を亡くしたどんな女性についても言えます。

夫に先立たれたひとりの女性はこう語ります。「私の夫ラッセルは、第二次世界大戦中、太平洋戦域で医療補助員として従軍した経験がありました。幾つかの恐ろしい戦闘を見、それをくぐり抜けた人でした。米国に帰還してからは、もっと平穏な日々を送り、後に神の言葉の奉仕者として仕えるようになりました。60代の初めに、夫は心臓障害の兆候を示すようになりました。それでも、努めて活動的な生活を送っていました。しかし、1988年7月のある日、ひどい心臓発作に襲われて、そのまま死にました。ラッセルを亡くしたことは、私にとってあまりに強い打撃でした。別れのことばを述べることもできなかったのです。彼は私にとって単に夫であっただけではありません。私の最良の友でもありました。40年のあいだ生活を共にしてきたのです。言い知れない寂しさを忍ばねばならないと感じました」。

これらは、日ごとに世界中の家族を襲っている幾万もの悲痛な別れのわずかな例にすぎません。悲嘆を経験しているたいのの人が語るはずですが、死があなたの子供を、夫を、妻を、親を、あるいは友を奪うとき、それはまさしく、クリスチানের筆記者パウロが述べたとおりのもの、まさに「最後の敵」です。その恐ろしい知らせに接するとき、最初の自然な反応は、多くの場合、「そんなはずはない！ そんなことは信じられない」という否定の念でしょう。これから先に見るとおり、その後に他のさまざまな反応の続くのが普通です。—コリント第一 15:25, 26。

しかし、このような悲嘆の気持ちについて考える前、愛する家族を亡くしたとき

に、幾つかの大切な質問にまず答えましょう。死は人にとっていっさいの終わりなののでしょうか。わたしたちの愛する人々に再会できるという希望がどこかにあるのでしょうか。

真の希望がある

聖書の筆記者パウロは、その「最後の敵」である死から解き放たれる希望について述べています。パウロは、『死は無に帰せしめられる』と書いています。「除き去られるべき最後の敵は死である」。(コリント第一 15:26, 新英訳聖書) なぜパウロはこのことをそれほど確信できたのでしょうか。死からよみがえらされたイエス・キリストご自身から教えを受けていたからです。(使徒 9:3-19) だからこそパウロは、次のように書くことができました。「死がひとりの人[アダム]を通して来たので、死人の復活もまたひとりの人[イエス・キリスト]を通して来るのです。アダムにあってすべての人が死んでゆくのに同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのです」—コリント第一 15:21, 22。

イエスは、ナインのあるやもめに出会って、そのやもめの死んだ息子を目にした時、ひどく悲しまれました。聖書の記述はこう伝えています。「[イエス]がその[ナインの]都市の門に近づくと、何と、見よ、死人が運び出されて来るころであった。それは、その母の独り息子であった。そのうえ、彼女はやもめだったのである。その都市のかなり多くの人々も彼女と一緒にいた。そして、彼女をご覧になると、主は哀れに思い、『泣かないでもよい』と言われた。そうして、近づいて棺台にお触りになった。それで、担いでいた者たちは立ち止まった。それからイエスは言われた、『若者よ、あなたに言います、起き上がりなさい！』すると、死人は起き直り、ものを言い始めたのである。次いでイエスは彼をその母にお渡しになった。ここにおいて、すべての者は恐れに打たれ、神の栄光をたたえつつ、『偉大な預言者がわたしたちの間に起こされた』、『神はご自分の民に注意を向けてくださったのだ』と

言いだした」。イエスがいかに哀れみの気持ちに動かされてそのやもめの息子を復活させたか、という点に注意してください。そして、そのことが将来に何を暗示するのかについても想像してください。—ルカ 7:12-16。

幾人もの目撃者がいるその場で、イエスは、見た者にとって忘れることのできない復活を行なわれたのです。それは、この出来事より少し前にイエスがすでに予告していた復活、すなわち、「新しい天」のもとでなされる地上の命への回復を保証するしとなりました。それよりも前に、イエスはこう言っておられたのです。「このことを驚き怪しんではなりません。記念の墓の中にいる者がみな、彼の声を聞いて出て来る時が来ようとしているのです」。—啓示 21:1, 3, 4。ヨハネ 5:28, 29。ペテロ第二 3:13。

復活を目撃した他の人々の中に、ペテロ、およびイエスの旅行に同行した12人のうちの他の幾人かが含まれています。それらの人たちは、復活したイエスがガリラヤの海のほとりで話をするのを現実に見たのです。その時の様子はこのように伝えられています。「イエスは彼らに、『さあ、朝食を取りなさい』と言われた。弟子たちのうち、『あなたはどなたですか』とあえて尋ねる者は一人もいなかった。それが主であることを知っていたからである。イエスは来て、パンを取って彼らに与え、魚も同じようにされた。イエスが、死人の中からよみがえらされたのち弟子たちに現われたのは、これで三度目であった」—ヨハネ 21:12-14。

このため、ペテロは全くの確信を込めてこのように書くことができました。「わたしたちの主イエス・キリストの神また父がたたえられますように。神はその大

いなる^{あわ}憐れみにより、イエス・キリストの死人の中からの復活を通して、生ける希望への新たな誕生をわたしたちに与えてくださったのです」—ペテロ第一 1:3。

使徒パウロも次のように述べて、自分の確信となっている希望を言い表わしています。『わたしは律法の中で述べられていること、預言者たちの中に書かれていることをすべて信じています。そしてわたしは神に対して希望を持っておりますが、その希望はこれらの人たち自身もやはり抱いているものであり、義者と不義者との復活があるということです』—使徒 24:14, 15。

ですから、多くの人には、自分の愛する人たちが、この地上で、しかも今とは非常に異なった状況のもとで生き返るのを見るという確実な希望があるのです。それはどのような状況でしょうか。故人となったわたしたちの愛する人々のために聖書が差し伸べるこの希望のさらに細かな点については、「死んだ人たちのための確かな希望」という、この冊子の最後の部分で論じられています。

しかし、愛する人との死別のために悲嘆しておられる方たちのため、その方たちが抱いておられるかもしれない疑問に答えることからまず始めましょう。このような悲しみを感じるのは異常なことですか。自分の悲しみにどうしたら耐えてゆけるでしょうか。他の人たちはどのように助けになれますか。わたしたちとしては、悲嘆に暮れている人たちをどのように助けることができますか。そして、大切な点として、聖書は死んだ人たちのための確かな希望としてどんなことを述べていますか。自分の愛する人にもう一度会えるでしょうか。そして、それはどこで？

愛する家族を亡くしたとき

このように感じるのは 普通のことですか



身 近な親族を亡くしたある男性はこう書いています。「英国に育った子供として、私は自分の感情を人前で表わしてはいけな^いと教えられていました。私が何かで痛がっていたとき、元軍人の父親が、きつとした口調で、『泣いてはいけな^い!』と言ったの

を覚えています。私は、母親が私たち子供たちのだれか(4人いた)に口づけしたり抱擁したりしたことがあるかどうかを思い出せません。自分が父親の死に接したのは56歳の時でした。言いようのない喪失感を覚えました。それでも、初めのうち、私は泣くことができませんでした」。

文化の違いによりますが、人々が自分の感情をあらわに表現する土地もあります。喜んでいようと悲しんでいようと、他の人たちは、その人がどのような気持ちでいるのかすぐに分かります。他方、世界のある地域、ことに北ヨーロッパや英国の人々、とりわけその男性は、自分の感情を秘め、情感を抑え、苦境にあっても弱みを見せず、心の内を外に表わさないようにしつけられています。しかし、大切なだれかと死別したとき、自分の悲しみの気持ちを表わすのは何か間違っているのでしょうか。聖書は何と述べていますか。

聖書の中の泣いた人々

聖書は東地中海地域のヘブライ人によって書き記されましたが、ヘブライ人は感情をよく表現する民族でした。聖書は、自分の悲嘆の気持ちを率直に表わした人たちの例を多く載せています。ダビデ王は殺害された息子アムノンの死を嘆き悲しみました。事実愛する家族を亡くしたとき

ダビデは、「非常に激しく泣いた」のです。(サムエル第二 13:28-39) ダビデは、王位を奪おうとした背信の息子アブサロムの死をさえ嘆きました。聖書はこう記述しています。「すると、王[ダビデ]は動揺して、門口の上の屋上の間^{もんぐち}に上って行って泣きだした。彼は歩きながら、このように言った。『我が子アブサロム、我が子、我が子アブサロムよ! ああ、わたしが、このわたしが、お前の代わりに死ねばよかったのに。アブサロム、我が子よ、我が子よ!』」(サムエル第二 18:33) ダビデは普通の父親ならだれもがするように悲しみました。そして、どれほど多くの親たちが、子供の代わりにむしろ自分が死ねばよかった、と感じてきたことでしょう。子供が親より先に死ぬというのはあまりに不自然なことに感じられるのです。

イエスは友人ラザロの死に対してどのように反応されたでしょうか。その墓に近づいて、涙を流されたのです。(ヨハネ 11:30-38) 後に、マリア・マグダレネも、イエスの墳墓に近づきつつ泣きました。(ヨハネ 20:11-16) 確かに、聖書の述べる復活の希望を理解しているクリスチャンは、死者の状態に関して聖書にはっきり根ざした信条を持たないある人々のように、悲しみに打ちひしがれてしまうことはありません。と

はいえ、普通の感情を持つ人間として、真のクリスチャンも、復活の希望を抱いてはいても、だれにせよ愛する者の死を悼み、嘆き悲しむのです。一テサロニケ第一4:13, 14。

泣くべきか、泣くべきでないか

今日のわたしたちの反応はどうでしょうか。感情をはっきり示すのは難しい、あるいは、きまりが悪いでしょうか。カウンセラーたちは何を勧めていますか。それらの人々の現代の見解は、多くの場合、靈感

による聖書の古代の知恵を繰り返しているにすぎません。自分の悲嘆を抑えるのではなく、それを表現すべきである、とそれらの人々は述べています。これは、ヨブ、ダビデ、エレミヤなど、古代の信仰の人々を思い出させます。それらの人々の表わした悲嘆の情は聖書の中に残されています。彼らは自分の感情を封じ込めたりはしませんでした。ですから、自分を孤立させてしまうのは賢明ではありません。（箴言18:1）もちろん、哀悼の気持ちの表わし方は文化によって異なりますし、それぞれの土地で

愛する者を亡くしたとき、悲しんだり泣いたりするのは正常なこと



行き渡っている宗教信条によっても違ってきます。*

泣きたい気持ちになったらどうしたらよいでしょうか。泣くことは人間の性質の一部です。ラザロが死んだ時のことをもう一度思い起こしてください。その時イエスは「霊においてうめき……涙を流された」のです。(ヨハネ 11:33, 35) こうしてイエスは、悲しみ悼むことが、愛する人の死に際して決して異常な反応ではないことを示されました。

この点は、小さな娘レイチェルをSIDS(乳児突然死症候群)で失った母親アンの場合によく示されています。アンの夫はこのように述べています。「不思議なことに、アンも私も、葬式では泣きませんでした。ほかのみんなが泣いていました」。しかし、これにこたえてアンはさらにこう述べました。「そうです、でも私は、わたしたちふたりのためにたっぷり泣きました。その悲しい出来事の数週間後、ようやく自分独りになって家にいたある日、私はこみ上げてくるものを抑えられませんでした。私は一日じゅう声を上げて泣きました。でも、それが助けになったと思います。それで気持ちが楽になりました。自分の子供の死を悲しまないではいられなかったのです。悲しんでいる人たちには泣かせてあげるべきだと本当に思います。『泣かないで』と声をかけるのがある意味で自然な反応のようですが、それは実際には助けになりません」。

ある人たちはどんな反応をするか

自分の愛する者の死のゆえに悲痛な心情になったとき、ある人はどんな反応をしたでしょうか。一例として、ファニータの場合を取り上げましょう。ファニータは赤子を亡くすることがどのような気持ちにならせるか

* 例えば、ナイジェリアのヨルバ族の人々は、伝統的に魂の輪廻を信じています。そのため、母親が子供を亡くした場合、強い悲嘆が示されますが、それはほんのしばらくの間だけです。ヨルバ語の言い回しにあるとおり、「こぼれ出たのは水、ひょうたんが割れたわけではない」からです。ヨルバの人々によると、これは、水を運ぶひょうたんとも言わなければならない母親は、恐らく死んだ子供の輪廻として、別の子供を産むことができる、という意味です。エホバの証人は、聖書に全く裏づけのない誤りの教えである不滅の魂や輪廻の思想に基づく迷信的な伝統にはいっさい従いません。—伝道の書 9: 5, 10。エゼキエル 18:4, 20。

愛する家族を亡くしたとき



悲嘆の過程

「過程」といっても、悲しみに決まった日程やプログラムがあるわけではありません。悲しみのさまざまな反応はときに重なり合い、その長さにも個人差があります。ここに書き出したのはそのすべての例ではありません。これ以外の反応もあることでしょう。以下は、人がよく経験する悲嘆の症状のいくつかです。

初期の反応: 当初の精神的衝撃。信じられない気持ちになって、それを否定する。感情的に無感覚になる。とがめの気持ち。怒り。

強度の悲嘆は下記の症状を伴うことがある: 記憶の喪失と不眠。極度の疲労。気分の急な変化。判断や思考の誤り。泣き叫びたくなる気持ち。食欲の変化と、それによる体重の増減。体調異常の種々の兆候。無気力感。作業能力の低下。種々の幻覚——死んだ人が触れたり、その声を聞いたり、姿を見たりしたという感覚。子供を亡くした場合、配偶者に対する不条理な憤まん。

安定期: 懐かしさの交じる悲しさ。故人についての楽しい思い出が多くなり、明るい冗談の伴うことさえある。

を知っています。すでに5回も流産の経験があったからです。彼女はもう一度妊娠しました。そのため、車の事故で入院を余儀なくされた時、当然のことながら心配しました。2週間後に、時ならぬ陣痛が始まりました。しばらくして、小さな女の子バネサが産まれました。900㍑を少し超えるだけでした。「私はとても興奮しました。自分もついに母親になったのです!」とファニータは思い返しています。

しかし、彼女のこの幸福感は長く続きませんでした。その4日後、バネサは死にました。ファニータはこう回想しています。「私は非常にうつろなものを感じ



流産と死産 — 母親の悲しみ

モナにはすでにほかの子供たちがいましたが、今度の子供の誕生も心待ちにしていました。産まれ出る前でさえ彼女が「一緒に遊び、話しかけ、夢にまで見た」子供だったのです。

母親と、まだ産まれ出ていない子供とのきずなの形成には強力なものがありました。彼女はこう続けます。「レイチェル・アンは、私のおなかの上の本を蹴り落とし、夜には私を寝かせてくれない子供でした。初めて小さく蹴ったころのことを今でも覚えています。そっと優しく小突くような感じでした。この娘が身を動かすたびに、私は深い愛情でいっぱいになりました。私はあの子のことをよく知り、痛がっているときも病気のときも分かるようになりました」。

モナはさらにこう語ります。「医師は私の言うことを信じようとせず、分かってくれた時には遅すぎました。医師は、心配しないでよいと言っていました。私は、娘が死んでしまうような気がしたのだと思います。娘は突然激しく向きを変え、翌日には死んでいました」。

モナの経験は決して類例のないものではありません。

「胎児の死に耐えて」の著者フリートマンとグラッドスタインによると、米国だけでも毎年およそ100万人の女性が流産や死産を経験しています。言うまでもなく、世界的な規模で見ると、この数字はずっと大きくなります。

人は往々にして気づかないのですが、流産や死産は女性にとって悲劇であり、いつまでも、場合によっては生涯忘れられない思い出となります。例えば、ベロニカは現在50歳を過ぎた女性ですが、何度かの流産を覚えており、とりわけ9か月目まで生存し、体重6kgにもなって死産した赤ちゃんのことを思い出します。彼女はその子が死んだまま

2週間も胎内に宿していました。「死んだ赤子を産むというのは、母親にとって辛いことなのです」と彼女は語ります。

これら失意した母親の心理的反応は、同じ女性からさえ必ずしも理解されません。流産で自らの子供を失ったある女性是这样書いています。「非常に苦しい方法で私が学んだのは、この事が自分の身に起きるまで、友人たちが耐えていた事柄について自分が全く知らなかった、という点です。人々は今の私に対して冷淡で無知だと感じるのですが、私自身がかつてはそのような立場の人たちに関してそうだったのです」。

悲嘆する母親にとってもう一つの問題は、その子を失ったことに対して、夫が自分と同じように感じてくれないように思えることです。ひとりの妻はその点をこう言い表わしています。「私はそのとき自分の夫にたいへん失望しました。夫には、そもそも妊娠などなかったのです。私の味わっていた悲しみを夫は経験できなかったのです。私の不安にはとても同情してくれましたが、私の悲しみは分かってもらえませんでした」。

このような反応は、夫としてはむしろ自然かもしれませ

ん。夫は、妻が妊娠を通して身体的また感情的に築き上げる胎児とのきずなを持たないのです。とはいえ、夫も喪失を忍ぶのです。ですから、夫と妻の双方が、たとえ感じ方に違いがあ

としても、やはり苦しみを共にしているのだ、という点を認めることが大切です。二人はそれぞれの悲しみを分かち合うべきです。夫の側がそれを表に現わさないでいると、妻のほうでは、自分の夫は無神経だと考えるかもしれません。ですから、涙を共にし、気持ちいを分かち、抱擁をもって互いを包んでください。かつてなく互いを必要としている、ということを示してください。そうです、夫である人たち、感情移入をしてください。



ました。母親としての誉れは取り去られたのです。全く満たされない気持ちでした。家に戻ってバネサのために私たちが用意していた部屋に入り、その子のために自分が買っていた小さな肌着を見るのは心の痛むものでした。その後の二、三か月のあいだ、私は娘の誕生の日のことを思い返していました。だれとも何のかかわりも持ちたくありませんでした」。

極端な反応でしょうか。他の人たちには理解しにくいかもしれませんが。しかし、ファニータのようにそれを実際に経験した人たちは、このような赤ちゃんの場合であっても、しばらく生活した人との死別の場合と同じ悲しみを味わったと語ります。生まれるずっと前から、その子は親たちから愛されていた、とその人々は話すことでしょう。母親とは特別のきずなができています。その赤子が死ぬとき、まぎれもなくひとりの人が失われたことを母親は感じるのです。そして、これこそ他の人々が理解すべき点です。

怒りやとがめの気持ちがどのように影響するか

別の母親は、自分の6歳の息子が先天性の心臓疾患のために急死したことを伝えられたとき自分がどのように感じたかを話しています。「私は、感覚のみ、信じられないという思い、とがめの気持ち、そして、あの子の病気の重さを悟らなかった夫と医師に対する怒りなど、一連の反応を経験しました」。

怒りの気持ちも悲嘆のひとつの兆候です。それが医師や看護婦たちへの怒りとなることもあります。死んでしまう前にもっと手をつくしてくれるべきだったとを感じるのです。あるいは、間違ったことを言ったりしているように思える友人や親族に対する怒りとなることもあります。どうして自分の健康をもっと大切にしなかったのかと、故人となった人に対し憤りを持つ人たちもいます。ステラはこのように回想しています。「私は、自分の夫に対して憤りを感じたのを覚えています。このようにならなくてもよかったのを知っていたからです。主人はかなりの病気だったのに、医者愛する家族を亡くしたとき



子供の死は耐えがたい心の衝撃 — 純粋な同情と感情移入が その親たちの助けとなる

の警告を無視したのです」。そして、今は亡き人への憤りの気持ちは、あとに残された人にその死がもたらした重荷のためである場合もあります。

そうした怒りのために罪の意識を持ってしまう人もいます。つまり、怒りを抱いたということで自らをとがめることがあるのです。愛する者の死について自分を責める人たちもいます。「もっと早く医者に行かせていたなら」、「別の医者にみせていたなら」、あるいは「もっと健康に注意させていたなら、死ななかっただろうに」と考えるのです。

この罪の意識がさらに進むこともあります。特に、愛する者を突然に、全く予期しない状況で亡くした場

合です。今は亡き人に対してかつて怒ったり言い合ったりした時のことを思い出しはじめるのです。あるいは、その死んだ人のために自分のすべき事を全部してあげられなかったと悔やむこともあります。

多くの母親のこうして長く続く悲嘆の過程は、多くの専門家が述べている事柄の裏づけとなります。つまり、子供の死は親、とりわけ母親の生活に、いつまでも残るすきまを生じさせます。

配偶者を亡くしたとき

夫もしくは妻との死別もいやしがたい衝撃となります。とりわけ、二人が連れ添って活動的な人生を送っ

てきた場合にはそうです。それは、旅行、仕事、種々の楽しみ、相互の依存など、二人が共にしてきた生活スタイル全体の終わりを意味します。

ユニスは夫が心臓発作で急死した時のことをこう説明しています。「初めの1週間、私は感情的に無感覚になっていました。まるで自分の機能が停止してしまったかのようなでした。物を味わうことも、においをかぐこともできませんでした。とはいえ、私の論理的感覚だけは別個に働いていました。CPRと投薬によって主人の病状を安定させる努力がなされていた間ずっとそのそばにいましたから、私はよくある拒否症状は経験しませんでした。それでも、強いざせつ感



乳児の突然死 — その悲しみと闘う

乳児の突然の死は言いようのない悲劇です。何の異常もなく健康そうに見えた赤ちゃんが、ある日、全く目を覚まさないのです。ほんとうに思いもよらないことです。乳児が、あるいは子供が、親より先に死ぬことをだれが予測するでしょうか。母親の限りない愛の中心となっていた赤ちゃんが、突如、果てしない悲しみの源となってしまうのです。

罪の意識がわき起こってきます。何かの怠慢が原因であったかのように、親たちはその死に責任を感じてしまうのです。『どうすればこのようなことを避けられたのか』と自問します。^{*} 夫の側が、何ら根拠があるわけではないのに、無意識にせよ、妻を責める場合もあります。自分が仕事に出たとき、子供はちゃんと生きており、元気だった。家に帰ってみたら、その子がもうベッドの上で死んでいた。妻は何をしていたのか。その時どこにいたのか。夫婦の生活に緊張のもとを作らないためにも、これらの煩もんをきちんとさせておかなければなりません。

^{*} 乳児突然死症候群(SIDS)は、通常、生後1か月から6か月の赤ちゃんに生じるもので、健康な赤ちゃんが何ら説明のつかない原因で突然死亡した場合に用いられる語です。赤ちゃんをおお向けまたは横向きに寝かせ、うつ伏せにならせないようにすれば、避けられる場合もあるとされていますが、寝かせる姿勢だけではすべてのSIDSが防げるわけではありません。

予見しなかった、いえ、予見しえなかった状況がその悲劇をもたらしたのです。聖書はこう述べています。「わたしは日の下で引き返して見たのであるが、速い者が競走を、あるいは力のある者が戦いを自分のものにするわけではない。また賢い者が食物を得るのでも、理解のある者が富を得るのでもなく、知識のある者たちが恵みを得るのでもない。なぜなら、時と予見しえない出来事とは彼らすべてに臨むからである」—伝道の書 9:11。

赤ちゃんを亡くした家族がいる場合、他の人たちはどのように助けになれるのでしょうか。子供を亡くしたことのああるひとりの母親はこう答えています。「ある友人は、私が何も言わなかったのに、訪ねて来て、家の掃除をしてくれました。別の人たちは私たちのために食事を作ってくれました。ある方はただ抱擁して支えてくださいました — 何も言わずに、ただ抱擁だけです。私はその事について話したくありませんでした。起きた事について何度も繰り返し説明する気にならなかったのです。私がか何かを怠っていたかのように問いただす質問は要りませんでした。私はその子の母親です。私の子供を助けるために、自分はどんなことでもしたのです」。

がありました。車が断がいから落ちて行くのを見ていながら、自分では何もできないでいるような気持ちでした」。

彼女は泣きましたか。「もちろん泣きました。特に、送られてきた何百通もの慰めのカードを読んでいた時です。一枚ごとに声を上げて泣きました。それは、その日の残りのひと時に立ち向かう助けになりました。でも、自分がどのような気持ちかと幾度尋ねられても、それは何の助けにもなりませんでした。どう見ても、私は惨めな気持ちでした」。

ユニスにとって、悲しみをこらえて生きる助けとなったものは何でしたか。彼女はこう語っています。「それと気づかず、無意識のうちに、自分のこれまでの生活を続けてゆこうと思い定めていました。それにしても、今なお辛く感じられるのは、日々の生活をあれほど愛した主人が、いま共にいてそれを楽しめないことを思うときです」。

『他の人の言うままに なってはならない』

「告別— さようならをいつ、どのように」の著者たちはこう忠告しています。「他の人の言うままに行動したり感じたりしてはいけな。悲しみがどのような過程をたどるかは人それぞれに違う。あなたは悲しみすぎている、あるいはもっと悲しんでもよいと他の人たちは考え、その考えをあなたに知らせようとするだろう。そうした人たちを許して愛する家族を亡くしたとき

あげると共に、それを忘れてしまいなさい。他の人たちが、あるいは社会全体が作り上げた型に無理に自分を合わせようとすることによって、感情面での健康の回復のための自分の成長を妨げることになる」。

言うまでもなく、悲しみに対処する方法は人によっ

て異なります。どんな人にとってもある一つの方法が他の方法より必ず優れている、と言おうとしているのではありません。しかし、沈滞した状態になり、悲嘆に暮れた人が現実の状況に自分を合わせることができなくなってしまうなら、そこには危険があります。その時には、同情心のある友人からの助けが必要でしょう。聖書は、「真の友はどんな時にも愛しつづけるものであり、苦難のときのために生まれた兄弟である」と述べています。ですから、助けを求めること、話すこと、そして、泣くこともためらわないでください。— 箴言 17:17。

悲しみは死別に対する自然な反応であり、悲嘆していることが人の前であらわに示されるときも悪いことではありません。しかし、答えの必要な質問がほかにもあります。『自

分の悲しみにどうしたら耐えてゆけるのでしょうか。とがめや怒りの気持ちを感じるのは普通のことですか。そのような反応にどう対処したらよいでしょうか。死別の悲しみを忍ぶのに何が役に立ちますか』。次の部分はこれらの問いに、また他の多くの問いに答えることでしょう。

考察すべき点

悲しみの表わし方は背景となる文化によってどのように異なる場合がありますか

悲しみを率直に表わした人として聖書の中にどんな例がありますか

愛する人との死別に対してある人たちはどのように反応しましたか。同じ経験をお持ちなら、あなたはどのように対応されましたか

配偶者の死はどのような意味で特別の経験となりますか

悲しみはどのような過程をたどりますか。悲しむのは悪いことですか

悲嘆の過程にはどんな面がありますか (9ページの囲み記事)

乳児の突然死の場合、どんな特殊の状況が親たちに影響しますか (12ページの囲み記事)

多くの母親は流産や死産からどんな影響を受けますか (10ページの囲み記事)

この悲しみにどうしたら 耐えてゆけるでしょうか



「私は自分の感情をこらえるのにかなりの重圧を感じました」。マイクは、父親が死んだ時のことを思い出してこのように語ります。マイクにとって、自分の悲しみを抑えるのは男らしいことでした。しかし後に、自分のこの考え方が正しくないことに

気づきました。それで、マイクの友人が祖父を亡くした時には、自分がどのようにしたらよいか分かっていました。こう語っています。「何年前だったなら、肩をたたいて、『めそめそするなよ』と言っていたことでしょう。しかし今は、彼の腕を取ってこう言いました。『どのようにでも君の感じるままでもいいんだよ。それが君の助けになるんだから。独りでいたいのなら、僕はどこかへ行くし、一緒にいて欲しいなら、僕はここにいる。感じるままにいることを恐れなくてもいいんだよ』」。

マリーアンも、夫を亡くしたとき、自分の感情をこらえることに難しさを覚えました。このように回想しています。「私は、他の人たちの良い手本にならなければいけないと考えて、自分の普通の感情を表わしませんでした。でも、他の人のために強い支えになろうとしてみても、自分の助けにはならないことをやがて知りました。私は自分の状況を分析してみて、『どうしても泣きたければ泣いたほうがよい。強がってはいけない。それを自分の体から出してしまいなさい』と言えるようになりました」。

こうして、マイクもマリーアンも共に、**悲しみがあるならそれを表わしなさい**、と勧めています。これは間違いではありません。なぜ？ なぜなら、悲しみを感じて表わすことは、感情を解きほぐすのに必要なことだから

です。感情を解放することによって、重圧となっているものを除くことができます。感じていることをそのとおり自然に表現することは、それに正確で思いやりのある情報が伴っているなら、あなたの感情を正しい視点に置くのに役立つのです。

もちろん、すべての人が自分の悲しみを同じ方法で示すわけではありません。そして、愛する人を急に亡くしたのか、あるいは長い闘病の後であったのかという点も、残された人の感情面の反応に関係することでしょう。とはいえ、一つのことは確かなようです。つまり、自分の感情を抑圧することは、体の面でも情緒の面でも有害です。自分の抱く悲しみの気持ちを解放するほうが、ずっと健康的なのです。どのように？ 聖書はこの点で实际的な助言を差し伸べています。

悲しみの気持ちを解放する — どのように？

話すことは感情の解放に役立ちます。古代の族長ヨブは、自分の10人の子供すべてに先立たれ、加えて他の幾つもの悲劇に遭遇したとき、このように言いました。「わたしの魂は自分の命に対して確かに嫌悪を感じず。わたしは自分についての気遣いを漏らそう[ヘブライ語、「解き放とう」]。わたしは自分の魂の苦しみのうちにあって語ろう！」(ヨブ 1:2, 18, 19; 10:1) ヨ

愛する家族を亡くしたとき

ブとしては、自分の気にかかっている事柄をもはや抑えておくができませんでした。それを解き放つことが必要であり、『語らないでは』いられませんでした。同じように、英国の劇作家シェークスピアも「マクベス」の中にこう書いています。「悲しみには言葉を与えよ。黙せし悲嘆は、ふくらみすぎし心にささやきて、その破裂を命ぜん」。

ですから、自分の感じている事柄を、辛抱づよく同情心をもって聴いてくれる「真の友」に話すのは、ある程度の安らぎとなります。(箴言 17:17) 自分の経験や感情を言葉で言い表わしてみると、それを理解し、それと取り組むことが大抵の場合やさしくなります。そして、聴いてくれる人が、同じように肉親を亡くしたことがあり、死別の経験を乗り越えた人であれば、問題にどのように対処したらよいかについて何かの実験的な提案をくみ出すことができるでしょう。ひとりの母親は、自分の子供を亡くしたとき、同じように死別の悲しみを知る別の母親と話すことがどうして支えとなったかを、このように述べています。「ほかにも同じ経験を^{もた}して、それから立ち直っている人がおり、その人がしっかり生きて、生活にそれなりの秩序を取り戻していることを知るのは、私にとってとても力になりました」。

自分の感じていることを他の人に話したい気持ちにならないならどうでしょうか。サウルとヨナタンが死んだとき、ダビデは情感あふれる哀歌を詠んで、自分の悲しみの気持ちをそこに注ぎ出しました。その哀悼の詩はやがて聖書のサムエル記第二の書の一部として記録されました。(サムエル第二 1:17-27。歴代第二 35:25) これと同じように、自分の気持ちは文章愛する家族を亡くしたとき

のほうが表現しやすいと感じる人もいます。夫を亡くしたある人は、感じたことを書きしたため、自分の記したことを幾日ものちに読み返した、と話しています。これは、この人にとって気持ちを解きほぐす助けになりました。

話すにせよ書くにせよ、自分の感情を何かの形で伝えることは、悲しみを解きほぐす助けになります。それはまた、何か誤解している点を整理するのに役立ちます。子供を亡くしたある母親はこのように話しています。「夫と私は、子供を亡くしたあとに離婚してしまった人たちのいることを聞き、そのような事が自分たちに起きないようにと願いました。それで、何かの怒り



聖書の中の例は、自分の気持ちを
書きとめてみることで悲しみの
気持ちを表現する助けになる
場合のあることを示している

を感じて相手を責めたい気持ちになった時にはいつも、二人でその点をよく話し合いました。そのようにすることによって、私たちはむしろ互いに引き寄せられたと思います」。こうして、自分の感情を伝えることによって、たとえ同じ死を悼んでいる場合でも、人によって悲しみ方が違い、それぞれのペースと方法があるのだ、という点を理解できるようになるでしょう。

もう一つ、悲しみを解きほぐすのに役立つのは、声を出して泣くことです。『泣き叫ぶのに時がある』と聖書は述べています。(伝道の書 3:1, 4) 自分の愛する人

の死はまさにそのような時です。悲しみの涙を流すことは、それから癒えるための過程として必要なことのようなのです。

ひとりの若い女性は、母親を亡くしたときに親しい友の一人がどのようにそれを乗り越える支えとなってくれたかを思い出してこう述べています。「友人はいつでも私の求めにこたえてそこにいてくれました。いっしょに泣き、話の相手となってくれました。私は自



どんな文化においても、悲しむ人にとって慰めは貴重なもの

分の感情をありのままに表わすことができ、それが私にとって重要でした。きまりの悪い思いをせずに声を上げて泣くことができたのです」。(ローマ 12:15をご覧ください。) 涙を見せることについて恥じらう必要ありません。すでに見たとおり、聖書の中には、イエス・キリストをはじめ、明らかに何らためらうことなく悲嘆の涙を人の前で流した信仰の男女の例がたくさんあります。一創世記 50:3。サムエル第二 1:11, 12。ヨハネ 11:33, 35。

しばらくは、自分の感情がどのようになるか予測もつかないようなことさえあるかもしれません。それほど予告もなく涙があふれ出て来ることもあるでしょう。夫を亡くしたひとりの女性は、スーパーマーケットでの買い物(夫の生前によくいっしょに行なったこと)が自分に涙をもよおさせることがあるのを知りました。とりわけ、夫の好物であった食品について手を伸ばしてしまったりしたときです。自分に寛容であってください。涙をこらえなければならぬと感じなくてもよいのです。忘れないでください、それは悲しみの、自然で、必要な過程なのです。

とがめの気持ちと取り組む

さきにも述べたとおり、自分の愛する者との死別の

のちに、罪の意識を感じる人がいます。この点は、忠信の人ヤコブが、自分の息子ヨセフは「たちの悪い野獣」に殺されたのだと信じ込まされた時に示した、激しい悲嘆の情を説明するものとなるかもしれません。息子たちの安否を確かめさせようとしてヨセフを遣わしたのはヤコブ自身でした。ですからヤコブとしては、『なぜ自分はヨセフを独りで出してしまったのか。なぜあの子を、野獣の群がる所に送ってしまったのか』と、自らを罪の意識で責めさいなんていたことが考えられます。一創世記 37:33-35。

あなたも、自分の側の何かの手落ちが、愛する人の死の一因となったと感じるようなことがあるかもしれません。実際にあれ、想像上のことであれ、その種のとがめを意識するのも、こうした悲しみに対するごく普通の反応の一つであることを理解しておくのは役立ちます。ここでも、そのような感情を自分だけのものにしておくべき理由はありません。自分がどのようにとがめを感じているかを話すことが、大いに必要な安どの気持ちをもたらすことでしょう。

しかしながら、どれほど人を愛しているとしても、わたしたち自身はその人の命を制御することはできず、「時と予見しえない出来事」がわたしたちの愛する人

愛する家族を亡くしたとき

に臨むのを防ぐことはできません。(伝道の書 9:11) さらに、あなたの動機は悪いものではなかったはずです。例えば、医師にみせるのをもっと早くできなかったからといって、あなたとしては、自分の愛する人が病気になるって死ぬことを意図したのでしょうか。もとよりそうではありません! では、その人の死を来たさせた責任が本当にあなたにあるのでしょうか。決してそうではありません。

ひとりの母親は、娘を車の事故で亡くしましたが、その後、とがめの気持ちに対処することを学びました。こう説明しています。「自分が娘を行かせたことで責められるのを感じました。でも、そのような感じ方は賢くないと思うようになりました。娘を父親といっしょに使いに行かせたことそのものに間違ったことはありません。それはただ、一つのひどい事故だったのです」。

『それでも、ああ言えば良かった、こうすれば良かったと思うことがあまりに多い』と言われるかもしれません。きっとそうでしょう。しかし、自分は完全な父親、母親、子供であった、と言える人がわたしたちの中にどれくらいいるのでしょうか。聖書は、「わたしたちはみな何度でもつまずくのです。言葉の点でつまずかない人がいれば、それは完全な人で(す)」と述べて、大切な点を銘記させています。(ヤコブ 3:2。ローマ 5:12)ですから、自分が完全ではないという事実を受けとめてください。『もしああしていれば』とあれこれ考えてみても、状況は少しも変わらず、むしろ立ち直りを遅らせてしまうだけでしょう。

自分の落ち度は想像ではなく実際のものだった、と信じるそれなりの理由があるとしましょう。その場合でも、罪の意識を和らげる点で最も重要な要素は何かを考えてください。それは、神からの許しです。聖書はこのような保証の言葉を与えています。「ヤハよ、あなたの見つめるものがとがであるなら、エホバよ、いったいだれが立ち得るのでしょうか。あなたのもとには真の許しがあるからです」。(詩編 130:3, 4) 過去に戻って事態を変えるということではできません。しかし、過去の愛する家族を亡くしたとき

誤りについて神の許しを請うことはできます。その後はどうすればよいのでしょうか。神が、以前の過ちをぬぐい去ることを約束しておられるのであれば、あなたも自分を許すべきではないでしょうか。—箴言 28:13。ヨハネ第一 1:9。

怒りの気持ちに対処する

もしかしたら、医師や看護婦たち、友人たち、さらには今は亡き人に対してさえ、ある種の怒りのようなものも感じておられるでしょうか。これも、死別に対するごく普通の反応の一つであることを認めてください。あなたのその怒りの気持ちは、自分が受けた打撃の自然な反映なのかもしれません。ある著述家はこう書いています。「その怒りの気持ちに気づくこと、しかしそれにしたがって行動せず、ただ自分がそれを感じていることを知っているだけで、それが持つ破壊的な影響から逃れることができる」。

自分のその怒りの気持ちを言い表わす、もしくは分かち合うことも助けになるかもしれません。どのように? もちろん、無制御に爆発させることによってではありません。聖書は、怒りの気持ちを長く宿しているのは危険であると警告しています。(箴言 14:29, 30) しかし、思いやりのある友とそれについて語り合うことが慰めとなることでしょう。また、怒りの気持ちが生じるとき、精力的に体を動かすことが、感情を解きほぐすのに役だったと感じている人たちもいます。—エフェソス 4:25, 26もご覧ください。

自分の感じている事柄について正直で包み隠しのないのは大切なことですが、ここで少し注意しておくべき点もあります。自分の感情を表現することと、それを他の人にぶつけることには大きな違いがあります。自分の感じた怒りや失意について他の人を責める必要はありません。ですから、自分の感情について思いのままに語りつつも、人に敵対したりすることのないよう気をつけてください。(箴言 18:21) 悲しみに対応してゆく点では、一つの非常に優れた助けがほかにあります。それについて次に取り上げましょう。



友人に頼りなさい：他の人が何か助けになろうとしていて、自分が少しでもその援助を生かせるようなら、それを受け入れることをためらわないでください。それが、その人の気持ちの表わし方でもあることを察してください。ちょうど良い言葉が見つけれないでいるのかもしれませんが。一箴言 18:24。

健康に気をつけなさい：悲しみは、特にその初めのうちは、人を疲れさせます。あなたの体は、これまで以上に十分な休養と健康的な運動と適切な栄養を必要としています。定期的に家庭医の診断を受けるのもよいかもしれません。

大きな決定は先に延ばしなさい：家を売るか、仕事を変えるかなどの決定は、できるなら、しばらく時間を置いて、はっきり判断できるようになるまで待つことです。(箴言 21:5) 夫に先立たれたひとりの婦人は、その死後幾日もしない時に主人の遺品の多くを人に分けてしまいましたが、後になって、自分にとって大事な思い出の品々も配ってしまったことに気づきました。

自分に対して寛容でありなさい：悲しみの気持ちは、人が普通に思うよりずっと長く続く場合があります。毎年その時期になると、今は亡き愛する人の思い出がよみがえって心がうずくこともあります。特別の写真、歌、ときには香りさえもが、涙をさそうこともあります。家族との死別に関するある科学的な研究は、悲嘆の過程を次のように説明しています。「遺族はひとつの感情から別の感情へと非常に速く劇的に揺れ動く。しばらくは、故人を思い出させる事物を避けようとする気持ちと、故人を意識的にしのぶ気持ちとが交錯することもある」。エホバの貴重な約束をいつも銘記しているようにしてください。一フィリピ 4:8, 9。

人の気持ちをくみ取りなさい：他の人たちに対しても辛抱よくありなさい。その人たちとしても、どことなく戸惑っているのです。どのように言ったらよいのか分からなくて、ぎこちなく場違いなことを言うってしまうこともあるのです。一コロサイ 3:12, 13。

悲しみを紛らそうとして薬やアルコールに頼ることは用心しなさい：薬や酒類によって何らかの安らぎが得られたとしても、それはせいぜい一時的なものでしかありません。薬剤の服用は医師の監督のもとで行なうべきです。その場合でも、注意してください。中毒性の薬物がたくさんあります。加えてそれが、悲しみの過程を長引かせることさえあります。一病理学者はこう警告しています。「悲劇は耐え、忍び、やがて理性的に受け止めねばならないものであるが、薬剤でその[当人]を打ちのめして無理にそれを阻むと、その過程を長引かせたり歪めたりする結果にもなる」。永続する安らぎは、エホバの壮大な約束について黙想することから得られます。一詩編 1:2; 119:97。

通常の日課に戻りなさい：仕事に出かけ、買物に行き、その他の務めを果たすのに、初めのうちは自分を多少強いなければならぬかもしれません。それでも、定めの日課をいつもどおりに追ってゆく営みが、あなたご自身にとって有益であることに気づかれることでしょう。クリスチャンの活動に忙しく携わってください。一コリント第一 15:58と比較してください。

深い悲しみから抜け出ることを恐れてはいけません：奇妙に聞こえるかもしれませんが、家族を亡くした人の中には、深い悲しみの状態から抜け出ることを恐れている人々もいます。それによって、故人となった人への愛が薄れることになりはしないかと懸念するのです。決してそうではありません。悲痛な気持ちを去らせることによって、必ずやいつまでも残るであろう大切な思い出に道を明けることになるのです。一伝道の書 3:1, 4。

過度に心配してはならない：『これから自分はどうなるのだろうか』と心配になることもあるでしょう。聖書は、一日一日と物事に取り組んでゆくようにと諭しています。「一日ごとに充実した生き方をしようとするのが私にとって本当に助けとなっています」と、夫を亡くしたひとりの女性は話しています。イエスは弟子たちに、「次の日のことを決して思い煩ってはなりません。次の日には次の日の思い煩いがあるのです」と言われました。一マタイ 6:25-34。

神からの助け

聖書はこう保証しています。「エホバは心の打ち砕かれた者たちの近くにおられ、霊の打ちひしがれた者たちを救ってくださる」。(詩編 34:18) そうです、神との関係が、他の何事にも勝って、愛する人の死に対応する助けとなるのです。どのようにでしょうか。ここまで述べてすべての現実的な提案は、神の言葉である聖書に基づき、あるいはそれになかったものなのです。これらの点を当てはめることは、耐えてゆくための助けとなることでしょう。

さらに、祈りの価値を見落とさないでください。聖書はこう勧めています。「あなたの重荷をエホバご自身にゆだねよ。そうすれば、神が自らあなたを支えてくださる」。(詩編 55:22) 同情心のある友に自分の感情について語りつくすことが助けとなるのであれば、「すべての慰めの神」に自分の心の中を注ぎ出すことは、はるかに大きな助けとなるはずではないでしょうか。一コリント第二 1:3。

祈ることによって単に気持ちが軽くなるというのではあ

りません。「祈りを聞かれる方」は、誠実に求めろご自分の僕たちに聖霊しもべを与えることを約束しておられます。(詩編 65:2。ルカ 11:13) そして、神の聖霊つまり神の活動する力は、あなたが日一日と進んでゆくことができるよう、『普通を超えた力』を与えることができます。(コリント第二 4:7) 忘れないでください、神は、ご自分の忠実な僕たちがどんな問題にぶつかろうとも、そのいずれにも耐え忍ぶことができるように助けることができるのです。

子供を死に奪われたひとりの女性は、その喪失に耐えてゆく上で、祈りの力が自分と自分の夫にとって愛する家族を亡くしたとき

どれほど支えとなったかを思い出して、こう語っています。「晩に家にいて、悲しみにただ押しつぶされそうになった時には、声を上げていっしょに祈りました。娘なしで何かをしなければならなかった最初の時、最初の会衆の集会に行ったとき、最初に大会に出席したとき、私たちは力ぞえを求めて祈ったものです。朝、目を覚まして、その現実が全くこらえがたいものに思えた時にも、助けてください、とエホバに祈りました。なぜか、自分独りで家に入ることは私にとって本当にやるせないものでした。それで、独りで家に帰っ

た時にはいつも、ただエホバに祈りをささげて、なんとか平静さを保てるようにお願いしました」。この忠実な婦人は、こうした祈りが間違いなく相違を来たしたことを確信しており、それは全く正しいことです。あなたも、たゆまぬ祈りにこたえ応じて、『一切の考えに勝る神の平和が、あなたの心と知力を守ってくださる』のを知ることでしょう。—フィリピ 4:6, 7。ローマ 12:12。

神が与えてくださる助けはまさしく相違を来たします。クリスチャンの使徒パウロは、神が「すべての患難においてわ

たしたちを慰めてくださり……わたしたちがどんな患難にある人たちをも慰めることができるようにしてくださる」と述べました。確かに、神の助けはその苦痛を除き去るわけではありません。しかし、それに耐えやすくすることができます。それは、あなたがもはや泣くことがないとか、自分の愛する者を忘れるとかいう意味ではありません。ですが、あなたは立ち直ることができます。そして、立ち直ることを通して、その経験は、同様の喪失に直面する他の人たちを助ける面で、あなたを、いっそう同情心に富む、思いやりのある人とすることでしょう。—コリント第二 1:4。

考察すべき点

悲しみがあるときそれを自然に表わすのはなぜ良いことですか

悲しみの気持ちを解きほぐすにはどうしたらよいですか

とがめや怒りの気持ちと取り組む点で聖書はどのように助けになりますか

愛する者との死別に耐えるのに、神との関係はどのように助けになりますか

悲しみと取り組むためにどんな現実的な提案がありましたか

他の人はどのように助けになれますか



「もし私にできることがあったら、何でも知らせてください」。家族を亡くしたばかりの友人や親族に、わたしたちはよくこのように言います。もちろん、誠実な気持ちでそう言うのです。役立つことがあるなら**どんな事でも**したいと思っているのです。

しかし、家族を亡くしたその人が、わたしたちに電話でもかけてきて、「あなたに助けていただける事を思いました」と言うてくるでしょうか。そのようなことは普通ありません。ここで明らかなように、悲嘆に沈んでいる人の真の支えとなり、慰めになろうとするのであれば、わたしたちのほうから何かを進んで行なうことが必要でしょう。

聖書の箴言はこのように述べています。「適切な時に話される言葉は、銀の彫り物の中の金のりんごのようだ」。(箴言 15:23; 25:11) 何を言い、何を言うべきでないか、また何をし、何をすべきでないかをわきまえることには知恵があります。以下に挙げるのは聖書に基づく提案で、肉親を亡くした人たちがほんとうに役立ったと感じた点です。

何をすべきか……

よく聴いてあげなさい：「聞くことに速く」ありなさい、とヤコブ 1章19節は述べています。あなたにできる最も大きな助けの一つは、よく耳を傾けて、肉親を亡くした人の悲痛な思いを共にすることです。肉親を亡くした人の中には、愛する人の死について、それが事故であって病気であっても、その様子について、またその別れ以来自分が感じていることについて、ぜひ話したいと感じている人たちもいます。ですから、「そのことについて話したいと思われますか」と尋ねてみるのが

よいでしょう。その人自身が決めるようにしてください。自分の父親が死んだ時のことを思い出して、ひとりの青年はこう話しています。「他の人たちが、それがどのようないきさつだったのかと尋ね、そのあと実際に耳を傾けてくださったのは、私にとって本当に力になりました」。辛抱づよく、同情心をこめて聴いてください。何かの答えや解決策を出さなければならないと感じる必要は必ずしもありません。何でもその人が伝えたいと思うことを話せるようにしてあげてください。

安心させてあげてください：その人が可能なかぎりを尽くしたのだという点(あるいは、ほかのどんな点でも、真実で積極的な見方だとあなたの知っていること)を認めてあげてください。悲しみ、怒り、とがめの気持ち、あるいは他のどんな感情にせよ、その人の感じていることが決して異例なものではないだろうという点でも安心させてあげてください。あなたの知っている方で、同じような死別の経験からしっかり立ち直った人の例について話してあげるのもよいでしょう。箴言 16章24節が述べるとおり、そのような「快いことば」は「骨のいやし」となります。—テサロニケ第一 5: 11, 14。

いつでも力になれるようにしなさい：多くの友人や親族がそばに来ている初めの数日だけでなく、何か月も過ぎて、他の人たちがそれぞれいつもの活動に戻った後にも、自分が助けになれることを示してください。

愛する家族を亡くしたとき

そのようにすることによって、「苦難」の時に友のそばに立つ「真の友」となれるでしょう。(箴言 17:17) 車の事故で子供を亡くした母親テレシアはこう述べています。「友人たちは、晩の時間に必ず何かを計画してくれて、私たちが自分たちだけで家で長く過ごさないでよいようにしてくれました。それは、私たちのうつろな感覚を満たす助けになりました」。そのあと幾年たっても、結婚の記念日や亡くなった日など、思い出となる日は、残された人々たちにとっては辛い時になりがちです。そのような日付はカレンダーに印を付けておいて、その日が巡ってきた時に、必要なら、同情の気持ちで自分も何か支えになれることを伝えられるようにすることはどうでしょうか。



**確かに必要な事柄がはっきり分かるなら、
求められるまで待たず、適宜率先して行なう**

愛する家族を亡くしたとき

適宜率先しなさい：何かの使い走りがありますか。だれかが子供たちを見ていてあげる必要がありますか。訪ねて来る友人や親族の泊まる場所が必要でしょうか。家族を亡くしたばかりの人とはかくぼう然としてしまって、他の人たちに何をして欲しいかを告げることはおろか、自分たちが何をしたらよいのかさえ分からなくなりがちです。ですから、確かに必要な事柄がはっきり分かるなら、求められるまで待つには及ばないでしょう。進んで事を進めてください。(コリント第一 10:24。ヨハネ第一 3:17, 18と比較してください。) 夫を亡くしたひとりの婦人はこのように回想しています。『『私にできることがあったら、知らせてください』と多くの方が言うてくださいました。でも、ある友人は何も尋ねませんでした。すぐに寝室に入って、ベッドから寝具を外し、主人の死に際して汚れのついたシャツ類を洗ってくれました。別の方は、バケツに水をくみ、そうじの道具を手にして、主人が吐いた床の敷物をきれいにしてくださいました。数週間後、会衆の長老のひとり、道具を持って仕事着で来てくださり、『何か直さなければならぬものがきつとあるでしょう。何でしょうか』と尋ねてくださいました。その方の助けは私の心にとって何と貴重だったのでしょう。ちょうつがい一つだけになっていたドアを修理し、電気の備品も直していただいたのです』。—ヤコブ 1:27と比較してください。

親切なもてなしを差し伸べなさい：「人を親切にもてなすことを忘れてはなりません」と聖書は諭しています。(ヘブライ 13:2) とりわけ、悲嘆に沈んでいる人々たちにもてなしを差し伸べることを銘記しているべきです。「いつでもいっしょい」という招待よりも、日と時間を決めてあげるほうがよいでしょう。たと

えその人が辞退しても、すぐにあきらめないことです。何かの穏やかな励ましが必要なのかもしれません。人の前で自制を失ってしまうことを恐れて、あなたの招きを断わったことさえ考えられます。あるいは、そのような時期に食事や友人との交わりを楽しむことのために思いを覚えるのかもしれません。聖書に出てくる、もてなしの精神に富んだ女性ルデアのことを思い出してください。ルカはその家に招かれましたが、「彼女はわたしたちを強いて連れて行った」と述べています。一使徒 16:15。

辛抱よくあり、思いやりを働かせなさい：肉親を亡くした人が当初口にしてしまう事柄にあまり驚かないでください。その人は怒りやとがめを感じているのかもしれないことを忘れないでください。感情的な爆発がたとえあなたに向けられたとしても、それは、いらだった反応をしないために、あなたの側の洞察と辛抱が求められる場合でしょう。「優しい同情心、親切、へりくだった思い、温和、そして辛抱強さを身に着けなさい」と聖書は勧めています。一コロサイ 3:12, 13。

手紙を書きなさい：しばしば見落とされているのは、哀悼や同情の気持ちを表わしたカードなどの手紙の価値です。その良い点ですか。母親をガンで亡くしたシンディーはこう答えています。「ひとりの友人は素敵な手紙を書いてくださいました。それはほんとうに助けになりました。何度も読み返すことができたからです」。その種の励ましの手紙やカードは、「少しの言葉」であるにしても、あなたの心から出たものであるべきです。(ヘブライ 13:22) その言葉を通して、あなたがその人のことを心にかけていること、自分もその亡くなった方についての特別の思い出を抱えていることを伝え、また故人となったその方によって自分の人生がどのように影響を受けてきたかを伝えることができるでしょう。

一緒に祈りなさい：家族を亡くしたその人たちと共に、あるいはその人たちのために祈ることの価値を軽く見ないでください。聖書は、「義にかなった人の祈願は……大きな力があ(る)」と述べています。(ヤコブ

5:16) 例えば、あなたがその人たちのために祈るのを聞くのは、とがめの念など、その人たちが持つ消極的な気持ちを和らげる助けになるでしょう。—ヤコブ 5:13-15と比較してください。

何をすべきでないか……

何を言い何をしたらよいかが分からないからといって何もしないでいてはいけません：『今はそっとしておいてあげたほうが良いだろう』と勝手に考えてしまうことがあるかもしれません。でも、実際のところは、場違いなことを言ったりしたりしてはいけないと思ってただ引き下がっているのかもしれません。しかし、友人や親族や信仰の仲間から敬遠されると、肉親を亡くした人にとってはいっそう寂しく、その悲痛な思いをただ募らせることにもなるでしょう。最も親切な言葉や行為とは、最も簡単なものである場合が多いのです。この点を覚えていてください。(エフェソス 4:32) ただあなたがそこにいることが励ましの元となることもあるのです。(使徒 28:15と比較してください。) 自分の娘が死んだ時のことを思い出してテレシアはこう語ります。「1時間もしないうちに、病院のロビーは友人たちでいっぱいになりました。すべての長老たちが夫人といっしょに来てくださいました。髪にカーラーを付けたままの女性たち、仕事着のままの方たちもおられました。皆やりかけの事をそのままにして駆けつけてくださったのです。何と言ったらよいかが分からないと言う方が大勢おられましたが、それは問題ではありませんでした。とにかくそこへ来てくださったのです」。

悲しまないでと無理に言うてはいけません：『まあ、まあ、泣かないで、泣かないで』と言ってあげたい気持ちかもしれません。しかし、涙はあふれさせたほうがよいでしょう。夫の死を思い返してキャサリンはこう語ります。「家族を亡くした人には、自分の感情を表わし、それをじゅうぶん出させてあげることが大切だと思います」。どのように感じるべきかを他の人に指示するようなことは避けてください。また、人の感情を守るために自分の感情を隠さなければならない、とも考えない

愛する家族を亡くしたとき



あなたがその病院で共にいることが家族を亡くした人の励ましとなることがある

てください。聖書はむしろ、「泣く人たちと共に泣きなさい」と勧めています。一ローマ 12:15。

亡くなった人の衣服その他の遺品を処分しないと、当人の備えができていないうちに性急な勧めをしてはならない：思い出を呼び覚ます品物は悲しみを長引かせやすいので、それは処分したほうがよいのではないかとわたしたちは感じるかもしれません。しかし、「目にしなければ忘れる」というのは、ここでは当てはまらないでしょう。家族と死に別れた人にとっては、亡くなった人のことを徐々に去らせてゆくことが必要でしょう。愛する家族を亡くしたとき

自分の年若い息子ヨセフが野生動物に殺されたのだと思い込まされた時の族長ヤコブの反応について、聖書の記していることを思い起こしてください。血にまみれたヨセフの長い衣を前にした時、ヤコブは「息子のために幾日も悼み悲しんだ。それで、すべての息子たち、すべての娘たちが次々に立ち上がっては慰めたが、彼は慰めを受け入れようと(はしなかった)」と記されています。一創世記 37:31-35。

『もうひとり赤ちゃんを持ってばよい』などと言ってはならない：子供を亡くしたひとりの母親は、自分の場合を

思い起こして、「人々が別の子供を持てばよいと言うのを聞いた時、私は憤慨しました」と語っています。悪ぎはなくこう言うのですが、死に別れた子供に取り替えがきくという意味の発言は、悲嘆に暮れる親たちにとっては、「剣で突き刺す」ような言葉なのです。（箴言12:18）ひとりの子供を別の子供と置き替えることは決してできません。なぜでしょうか。一人ひとりが独特の存在だからです。

亡くなった人のことを話題にするのをことさら避けてはいけない：ある母親はこう回想しています。「息子ジミーのことを話そうとせず、その名前さえ口にしない人がとても多くいます。率直に言うと、他の人たちがそのようにしたとき、私としては心証を害されました」。ですから、故人の名が出たからといってことさらに話題を変えるには及びません。亡くなった愛する人について話したいことがあるかどうか、その人に尋ねてみてください。（ヨブ1:18, 19および10:1と

比較してください。）家族を亡くした人の中には、友人たちに慕われた故人の特別な面などについて話を聞くのをうれしく思う人たちもいます。一使徒9:36-39と比較してください。

『それがいちばん良かったのだ』などとすぐに言うてはならない：死に関して何か積極的な点を見つけようとするのは、必ずしも、「憂いに沈んだ魂に慰めのことをかけ(る)」ことにはなりません。（テサロニケ第一5:14）母親が死んだ時のことを思い返してひとりの若い女性はこう話しています。「『お母さんはいまは苦しんではいない』とか、『とにかくいまは平安よ』と言う方たちがいました。ですが、それは私にとってうれしい言葉ではありませんでした」。この種の言い方は、残された人たちに、悲しむ必要はないとか、死別はそれ

ほどの意味を持たない、というように伝わることもあります。実際のところその人は、愛する人との別れを痛切に悼み、深く悲しんでいることでしょう。

『お気持ちはよく分かります』とは言わないほうがよい：本当に分かっているのでしょうか。例えば、子供を亡くした親の気持ちが、自分ではそのような死別の経験がないのに果たして分かるのでしょうか。たとえ同様の経験があるとしても、他の人はあなたと全く同じ感じ方をしていないかもしれないことも認めてください。（哀歌1:12と比較してください。）他方、もし適当であれば、愛する者との死別から自分がどのように立ち直ったかを話すことにはきっと何かの益があるでしょう。娘を亡くしたひとりの母親は、同じく娘に先立たれた別の母親から、普通の生活に戻るまでがどのようなであったかを聞いて力づけられました。こう話しています。「娘さんを亡くしたその方は、『あなたの気持ちはよく分かる』というようなかたちで話を始めませんでした。ただ自分がどうであったかを話して、私のことについては私に考えさせてくれました」。

家族を亡くした人を助けるためには、同情心と、識別力と、深い愛が求められます。あとに残された人があなたのところに来るのを待っていないでください。「私にできることが何かあるなら……」とは言わないでください。その「何か」を自分で見つけ、適宜率先して行なってください。

まだ幾つかの質問が残っています。聖書が差し伸べる復活の希望についてはどうでしょうか。それは、あなたにとって、また亡くなったあなたの愛する方にとって、どのような意味がありますか。それが信頼できる希望であることをどのように確信できますか。

愛する家族を亡くしたとき

考察すべき点

肉親を亡くした人の気持ちをよく聴いて
悲痛な思いを共にするのは
なぜ助けになりますか

悲嘆に沈んでいる人を慰めるために
できることとしてどんな事がありますか

死の悲しみにある人に言ったり
したりすべきでないことに
どんな事がありますか



死に関して子供たちを助ける

死が家族を襲うとき、親も他の親族や友人たちも、子供たちを助けてその起きた状況に立ち向かわせるために、何を言い、何をしたらよいかについて戸惑う場合が少なくありません。それでも、子供たちには、死と取り組む面で大人たちの助けが必要です。子供が人の死について理解できるように助けることに関連してしばしば尋ねられる点をここで取り上げましょう。

死について子供たちにどのように説明したらよいでしょうか 物事を分かりやすい言葉で説明することが大切です。それを真実に即したものとしてみてください。「死」や「死ぬ」など、現実的な言葉を使うことをためらわないことです。例えば、子供といっしょに座って、子供を腕で抱きながら、このように言えるでしょう。「とてもとても悲しいことが起きたの。お父さんは、あまりたくさんの方がかからない重い病気にかかって[あるいは、何にせよあなたの知っている真実な事柄]、死んだの。お父さんが死んだのは、だれかの間違いのためではないの。私たちはお父さんがいなくなってとても寂しい。私たちはお父さんが大好きでし、お父さんも私たちを愛していたから」。しかし、子供にしても残されているほうの親にしても、ときどき病気になることがあるからといって、そのためにその人がすぐに死ぬわけではないことも話しておくのがよいでしょう。

子供たちに質問を促してください。『死ぬってどういうことなの?』と子供は尋ねるかもしれません。このようにも答えられるでしょう。『「死ぬ」というのは、体が働かなくなって、それまでできたことが何も— お話することも、見ることも、聞くこともできなくなる、そう、何も感じなくなってしまうことなの。』聖書の述べる復活の約束を信じる親であれば、そのような折に、エホバ神が死んだ人を覚えておられ、将来地上の樂園に生き返らせることがおできになることも説明できるでしょう。(ルカ 23:43。ヨハネ 5:28, 29) —「死んだ人たちのための確かな希望」という部分をご覧ください。

何か言うべきでないことがありますか 亡くなった人は長い旅に出た、と言うのは助けになりません。見捨てられるのではないかという不安が子供にとって大きな心配であり、とりわ

け、親が死んだ場合にはそうです。亡くなった人は旅行に出たと聞かされると、見捨てられてしまうという子供の恐れを深くさせるだけで、『おばあちゃんは行ってしまった、さよならも言わないで!』と考えることでしょう。幼い子供に対しては、死んだ人が眠りに就いたという言い方にさえ注意があります。子供たちはそのまま文字どおりに理解する傾向があります。眠ることを死ぬのと同じに考えると、夜に床に入るのを怖がるようになることもあります。

子供たちは葬式に出るべきですか 親は子供たちの感情を考慮に入れるべきです。子供たちが行くことを望まないなら、強いることなく、また、行かないからといって悪いことをしているという気持ちを持たせないようにするべきです。子供たちが行くことを望むのであれば、どのような事がなされるのか、棺が置かれるのか、そのふたが開いているのか閉まっているのかなども細かに話しておくのがよいでしょう。大勢の人が悲しんで泣いているのを見るかもしれない、という点も説明してください。そして、子供たちに何でも質問をさせ、そこにずっといられないならそこから離れてもよいと話して、安心させてください。

子供たちは死に対してどんな反応をするでしょうか 子供たちは時に、大好きな人の死に対して責任を感じたりします。亡くなった人のことを以前に怒ったことが何度かあるために、子供はその怒った時の気持ちや言葉がその人を死なせたと思うのです。『あなたの気持ちや言葉が人を病気にならせたりすることはないし、死なせることもない』と、何かの慰めを与えることが必要かもしれません。幼い子供には、このようにして安心させる言葉が幾度も必要な場合もあります。

自分の悲しみを子供たちから隠すべきですか 子供たちの前で泣くとしても、それは正常なことであり、健全なことでもあります。実際に、自分の感情を子供たちに全く秘めておくことはほとんど不可能でしょう。子供はふつう非常に目ざとく、何か違ったことがあればたいい気づきます。自分の悲しみの気持ちについて正直であることによって、悲しむのも、時には自分の感情を表わすのも正常なことである、という点を子供に教えることができます。



死んだ人たちのための 確かな希望



ひとりの25歳の女性は、このように書いています。「私の育ての母は1981年にガンのために亡くなりました。この母の死は私と私の義理の弟にとって、たいへん辛いことでした。私は17歳、弟は11歳でした。とても寂しく感じました。その母が今では

天にいと教えられていましたから、それなら自分も命を絶って母のもとに行こうとも思いました。この母は、私にとって最良の友でもあったのです」。

自分の愛する人を奪い取ってゆく力が死にあるということは、あまりに不当なことに思われます。それが生じるとき、その愛する人とは、もはや二度と語り合えず、共に笑うことも、胸に抱くこともできないのだということは、きわめて耐えがたい考えです。あなたの愛する人は天に行ったと聞かされても、その悲痛な思いが必ず消え去るわけではありません。

しかし聖書は、これとは大きく異なる希望を差し伸べています。すでに述べたとおり、聖書は、近い将来、あなたの死んだ愛する方との再会が可能であることを示しています。どこか未知の天においてではなく、



ラザロを復活させた時のその細やかな感情は、
死による惨害をぬぐい去ろうとする
イエスの強い願いを反映している

この地上で、しかも平和と義の行き渡った状態においてです。そのとき人間は、完全な健康を楽しむ見込みを持ち、二度と死ぬ必要はありません。『しかし、それ愛する家族を亡くしたとき

はまさにただの願ひ事だ』と言われる方もおられることでしょう。

これが確実な希望であることをあなたに得心させるために何が必要でしょうか。ある約束を信じるためには、その約束をした人にそれを果たす意志も能力もあることを確信できることが必要でしょう。では、死者が生き返ることを約束しておられるのはどなたですか。

西暦31年の春、イエス・キリストははっきりとこう約束されました。「父が死人をよみがえらせて生かされるのと同じように、子もまた自分の望む者を生かす(の)です。このことを驚き怪しんではなりません。記念の墓の中にいる者がみな、彼[イエス]の声を聞いて出て来る時が来ようとしているのです」。(ヨハネ 5:21, 28, 29) そうです、イエス・キリストは、現在死んでいる無数の人々がこの地上に生き返り、楽園となった平和な状態のもとで永久にながらえる見込みを持つようになることを約束されました。(ルカ 23:43。ヨハネ 3:16; 17:3。詩編 37:29およびマタイ 5:5と比較してください。) イエスはこの約束をされたのですから、イエスにはそれを果たす意志もあるとみなして差し支えありません。では、イエスには、それを果たす能力もありますか。

この約束をしてから2年もしないころに、イエスは、



忠実なクリスチャンの中には、自分の悲しみをどのように乗り越えたかを語りつつ、「私の好きな聖書の言葉を引かせてください」と言う人が少なくありません。悲しみを経験しておられる方でしたら、ここに挙げる聖句の中にも助けになるものを見いだされるかもしれません。

「優しい^{あわ}憐れみの父またすべての慰めの神がほめたえられますように。神はすべての患難においてわたしたちを慰めてくださ……なのです」—コリント第二1:3, 4。

「あなたはみ手を開いて、すべての生きているものの願いを満たしておられます」—詩編 145:16。

「[神は]ご自分が任命したひとりの人によって人の住む地を義をもって裁くために日を定め、彼を死人の中から復活させてすべての人に保証をお与えになったからです」—使徒 17:31。

「わたしが — わたしがあなた方を慰めている者なのである」—イザヤ 51:12。

「自分の母に絶えず慰められる人のように、わたしもあなた方を絶えず慰めるであろう」—イザヤ 66:13。

「これが苦悩のときのわたしの慰めです。あなたのみことばがわたしを生き長らえさせたからです。エホバよ、わたしは定めのない時からあなたの司法上の定めを思い出しました。そして自分のために慰めを見いだします。あなたの僕^{しもべ}に対するそのみことばにしたがって、あなたの愛ある親切が、どうか、わたしを慰めるものとなりますように」—詩編 119:50, 52, 76。

「記念の墓の中にいる者がみな、彼の声を聞いて出て来る時が来ようとしているのです。良いことを行なった者は命の復活……へと出て来るのです」—ヨハネ 5:28, 29。

復活を成し遂げる意志も能力もあることを強力な方法で実証されました。

「ラザロよ、さあ、出て来なさい!」

それは感動的な光景でした。ラザロは重い病気にかかっていました。ラザロのふたりの姉妹、マリアとマルタは、ヨルダン川を渡った側にいたイエスのもとに言づけして言いました、「主よ、ご覧ください、あなたが愛情を抱いてくださる者が病気です」。(ヨハネ 11:3) そのふたりは、イエスがラザロを愛しておられたことは知っていました。イエスは病気の友人を見舞いに行こうとはされないのでしょうか。不思議なことに、イエスはすぐにベタニヤへは向かわず、自分のいた場所にそのまま二日間とどまっておられました。—ヨハネ 11:5, 6。

ラザロは、その病気について伝える知らせが出されてから間もなく死にました。イエスはラザロの死んだ時が分かっておられ、そのことについて何事かを行なおうとしておられました。イエスがようやくベタニヤに到着するまでに、その親しい友は死んで四日もたっていました。(ヨハネ 11:17, 39) イエスは、死後それほど長くたった人をも生き返らせることができたのでしょうか。

イエスが来られることを聞いて、行動型の女性であったマルタは走って迎えに出ました。(ルカ 10:38-42と比較してください。) その悲しみの様子に動かされて、イエスは、「あなたの兄弟はよみがえります」と言って安心させます。マルタが将来の復活に対する信仰を示すと、イエスははっきりとこう言われました。「わたしは復活であり、命です。わたしに信仰を働かせる者は、たとえ死んでも、生き返るのです」。—ヨハネ 11:20-25。

墓のところに来ると、イエスは、その入口を閉ざしている石を取りのけるようにと指示しました。そののち、声を出して祈ってから、「ラザロよ、さあ、出て来なさい!」と命令しました。—ヨハネ 11:38-43。

すべての目がその墓に注がれました。すると、その

愛する家族を亡くしたとき

暗闇^{やみ}の中から、人の姿が現われました。足と手には巻き布が巻かれ、顔も布でくるまれたままです。「彼を解いて、行かせなさい」とイエスは命じました。ほどき取られた最後の巻き布が地面に落ちました。そうです、それはラザロ、四日も死んでいたその人でした！—ヨハネ 11:44。

それは本当に起きたのですか

ラザロをよみがえらせたことについての記述は、ヨハネの福音書の中で歴史の事実として提出されています。ただの寓意物語^{えいぎ}とするには細部があまりに生き生きと伝えられています。その史実性を疑問視することは、イエス・キリストご自身の復活も含め、聖書に記録されているすべての奇跡を否定するのと同じです。そして、イエスの復活を否定するのは、クリスチャンとしての信仰全体を否定することになります。—コリント第一 15:13-15。

実際のところ、もし神の存在を認めるなら、復活を信じることには何の難しさもないはずです。例えば説明しましょう。人は自分の遺言を読み上げながら、それをビデオテープに撮ることができます。その人の死後、親族や友人たちは、財産をどのように扱うべきかについて、事実上その人が説明する様子を見たり聞いたりすることができます。100年前であったなら、そのような事は考えようもないことでした。そして、今でも、世界のへき地に住んでいる人の中には、ビデオ録画の技術を全く理解しがたい奇跡のようにみなす人たちもいるでしょう。創造者によって設けられた科学上の原理を人間が応用して、目に見え、耳に聞こえる場面を再現できるのであれば、創造者としてはそれよりはるかに多くの事柄をなし得るはずではないでしょうか。そうです、生命を創造した方は、その再創造をも行なうことができる、というのは当然の理屈ではないでしょうか。

ラザロの命を回復させた奇跡は、イエスと復活に対する信仰を増し加えさせるものとなりました。(ヨハネ 11:41, 42; 12:9-11, 17-19) それはまた、復活を愛する家族を亡くしたとき

行なうことに対するエホバとそのみ子の側の意欲と願いを感動的に表わし示すものでもあります。

『神は慕われる』

ラザロの死に対するイエスの反応は、この神のみ子のきわめて細やかな一面をのぞかせています。イエスがこの時に示した深い感情は、死者の復活に対するイエスの強い願いを明確に表わしています。こう記されています。「マリアは、イエスのおられる所に着いて彼のすがたを見ると、その足もとにひれ伏して、こう言った。『主よ、もしここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死ななかつたことでしょう』。それでイエスは、彼女が泣き悲しみ、また彼女と一緒に来たユダヤ人たちも泣き悲しんでいるのをご覧になると、霊においてうめき、また苦しみを覚えられた。そして、こう言われた。『あなた方は彼をどこに横たえたのですか』。彼らは言った、『主よ、おいでになって、ご覧ください』。イエスは涙を流された。それゆえユダヤ人たちは言いはじめた、『ご覧なさい、彼に対して何と愛情を抱いておられたのでしょうか』—ヨハネ 11:32-36。

この部分で、イエスの心からの同情心は、「うめき」、「苦しみを覚えられ」、「涙を流された」という三つの表現に示されています。この感動的な場面を記録するのに用いられた原語の言葉は、自分の親しい友ラザロの死に接し、またラザロの姉妹たちの泣くさまを見て、イエスがいたく心を動かされ、その目からは涙があふれ出ていたことを物語っています。*

特に注目すべきなのは、イエスがそれ以前にほかに二人の人を生き返らせていたことです。そしてイエスは、ラザロに対してもそれと同じ事を行なおう

*『うめいた』と訳されているギリシャ語は、痛切に、あるいは深く感じ入ることを表わす動詞(エンプリマオマイ)の変形です。ある聖書学者はこう述べています。「ここでのその唯一の意味は、イエスが深い感情にとらえられて、無意識のうめきがその心から絞り出されたということである」。「苦しみを覚えた」と訳されている表現は、揺れ動くことを暗示するギリシャ語(タラッソー)の変形です。一辞書編集者によると、それには、「内的な動揺を起こさせる、……激しい痛みや悲しみに影響する」という意味があります。『涙を流した』という表現は、「涙を流す、静かに泣く」という意味のギリシャ語(タクリュオー)の変形です。



キリスト・イエスの贖いの犠牲に基づく復活は、 すべての国の人々に喜びを与える

とはっきりと意図しておられました。(ヨハネ 11:11, 23, 25) それなのに、イエスは「涙を流され」ました。ですから、イエスにとっても、人に命を回復させることは単なるお決まりの手順ではないのです。この場面で表示されたその細やかな深い感情は、死による惨害をぬぐい去ろうとするイエスの強い願いを明確に示しています。

イエスは『エホバ神の存在そのものの厳密な描出』ですから、わたしたちの天の父にこれと同じものを期待するのは筋の通ったことです。(ヘブライ 1:3) 復活を行なうエホバご自身の意欲的な姿勢について、忠実な人ヨブはこうに述べました。「もし、強健な人が死ねば、また生きられるでしょうか。……あなたは呼んでくださり、私はあなたに答えます。ご自分のみ手の業をあなたは慕われます」。(ヨブ 14:14, 15) ここで「あなたは慕われます」と訳されている原語の言葉は、神の側の切なる熱望または願望を表わしています。(創世記 31:30。詩編 84:2) 明らかにエホバも、復活の時を大いに待望しておられるに違いありません。

わたしたちは、復活の約束を本当に信じることができすか。はい、エホバとみ子がそれを果たす意志も能力もお持ちであることには何の疑いもありません。これはあなたにとってどういう意味になりますか。まさにこの地上で、しかし今とは大きく異なる状態のもとで、あなたの死んだ愛する方と再会できるという見込みがあるのです。

エホバ神は人類を美しい園でスタートさせた方であり、今や栄光を受けたイエス・キリストの手にゆだねたご自分の天の王国の支配下のこの地上に、その

パラダイス
楽園を回復させることを約束しておられます。(創世記 2:7-9。マタイ 6:10。ルカ 23:42, 43) その回復された楽園において、人間家族は、どんな病気や疾病からも解放されて、終わりのない命を享受する見込みを持つことになります。(啓示 21:1-4。ヨブ 33:25; イザヤ 35:5-7と比較してください。) それと共に、いっさいの憎しみ、人種的偏見、民族間の暴力的対立、経済上の圧迫なども一掃されます。エホバ神は、このよう

に清められた地上において、イエス・キリストを通して死者の復活を行なわれるのです。

この部分の冒頭で言及したクリスチャンの女性がいま抱くようになったのはこのような希望です。その母親が亡くなってから数年後に、エホバの証人は、彼女を助けて聖書を注意深く研究できるようにしました。彼女はこうに回想しています。「復活の希望を知ったとき、私は泣かずにはいられませんでした。母に再び会えると分かったのは、すばらしいことでした」。

同じように、愛する人に再び会いたいという切なる願いを心に抱く方がおられれば、エホバの証人は、この確実な希望を学んであなたご自身のものとすることができるよう、喜んでお役に立ちたいと願っています。お近くの王国会館でエホバの証人と連絡を取るか、あるいは32ページにある住所のうち最寄りのところに手紙でお知らせください。

考察すべき点

友人のラザロが死んだとき、イエスは復活を行なう意志も能力もあることをどのように実証されましたか

ラザロの復活に関する聖書の記述を歴史の事実として受け入れることができるのはなぜですか

ヨハネ 11章にある記述は、死による惨害をぬぐい去ろうとするイエスの強い願いをどのように示していますか

エホバ神が復活の時を大いに待望しておられることを何が示していますか





詳しい情報を得たい方は www.jw.org をご覧になるか、
エホバの証人 (Jehovah's Witnesses) にご連絡ください。



we-J
171205